

---

# 青空の星

mohi-san

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青空の星

### 【Nコード】

N8378Y

### 【作者名】

mohiisan

### 【あらすじ】

ある日を境に『先輩』はあっさりと俺の目の前から姿を消した。それから一年。

同じクラスに転校してきた子は『先輩』と同姓同名の女の子だった。容姿も、性格も、先輩とは似ても似つかない。けれど何故かその子が気になって……

## 読む前に。

『恋愛』というテーマでお話を書いたことがなかったので、試しに書いてみた実験的なお話です。

過去の事を引きずった少年が、『転校生』というワードをきっかけに、周りと関わり、どのように乗り越えていくか……

そんな内容が書ければと思っています。

ハーレム要素などはありません。主人公がモテまくる、というような話を期待している方はごめんなさい。その予定もありません。

一人称で書いたのも久しぶりになるので、変、というか読みにくい所もあるとありますが、それはおいおいなんとかしていけるよう努力していこうと思います。

更新も不定期です。ストック溜めて一気に放出、という形をとると思います。

これら全てが許容できる、という心広いお方は、まあ、暇つぶし程度に読んでやってください。

はじめは往々に……

「衣笠つて天才だよな」

放課後の教室。机に足を乗せ、だらしなく座るクラスメイトが言った。

もう何度周囲から聞かされたか分からない言葉だ。だから返す言葉は決まっている。

「そんなことはない　俺はただの凡人だよ」

「なんだよそれ、嫌味かよ。成績は学年で常に一番、運動神経もいい。そのうえ顔も悪くないときてる。ホントにいるんだな、お前みたい完璧なやつ。どこのギャルゲの主人公だってオレはいいいたいぞ」

「なんだそれは……」

呆れながら返すと、クラスメイト、灰谷はニヒツと少年を思わせる人懐っこい笑みを見せる。

元を辿れば俺をからかって（……）出た笑顔だろうが……正直いってこいつのこういう表情は嫌いではない。少なくとも他の上辺だけの笑顔を見せる奴よりは何倍も好感が持てる。

でもやはりそこは俺も人間。釈然としない気持ちはあるわけで……

……だから、

「あ、でも俺にも一つ欠点があった」

「なんだそれ？　弱みならとことん突いてやるぞ」

「お前みたいな不良が友達にいたことだ」

意趣返しを込めて答えれば、灰谷はきよとした顔を浮かべー

瞬後には、

「違いねえ」

とまた、あの人懐っこい笑みをみせた。

だからこいつは嫌いになれない。

俺も唇の端を僅かに吊り上げ笑みをみせると、そういえば、と灰谷が唐突に切り出した。

「どうした？」

「もうすぐ一年だな」

「なんだ？ お前が最後に拾い食いをしてからか？」

「ばーか、ちげえよ。ほら、先輩が転校してからだよ」

『先輩』、その言葉に胸がちくりと痛む。

無意識に左胸にもって行きそうになる右手を左手で押さえ、

「なんだよ、突然」

平然な風を装って返して見れば、灰谷ははあ、と短くため息を吐き、

「顔、こわばってるぞ」

「……………」

その指摘に言葉を失う。

「まだダメみたいだな」

「……………そんなことはない」

「そういう事はそ平然とした顔で嘘をつけるようになってから言え

よ。先輩のことまだ引きずってるんだろ？」

どうなんだろう？ いや、考えるまでもない。考えるまでもないんだ。すでに答えは俺の中で出ている。ただ、その事実を素直に受け止められるか、受け止められないか、まあ、指摘されて素直に頷けるほどに、俺の心根は真っ直ぐではないことは確かみたいだが。

「アメリカ……遠いよな」

窓から見える茜色に染まる西の空を遠く見つめて灰谷が言う。

脱色した派手な金色の髪に、耳には安全ピンに似たピアス。前ボタンははずされシャツの隙間からは、センスがいいとはとても言えない派手な柄のシャツが除く。一般的に見ればだらしない格好、けれど彼いわく最高の格好なんだとか……、まあどうでもいいことだが、彼のシャツのセンスだけはどうにもただだけないと思う俺のセンスの方が一般からずれているのだろうか。いや、ほんとにどうでもいいな。

それはさておき、夕日に照らされて深い陰影をつくる横顔で黄昏ている姿は結構さまになってるから不思議だ。いや、不思議に思うことが不思議なのか。実際こいつはモテる。顔は俺から見ても整っていると思うし、世間一般で言ういわゆる『イケメン』という部類に入ると思う。だからこれは、俺がそう思ってしまったのは、いつのまにか俺とこいつの距離が、そう思えてしまえるほどに近づいていた証拠なのだろう。うん、これは意外な発見だ。

けれど一つだけ言っておかなければならない事がある。

「浸っているところ悪いが灰谷」

「なんだ悪友？」

「その方角にアメリカはないぞ」

「えっ！？ マジで……」

灰谷は振り返ると、恥ずかしそうな顔をこちらに向け、焦った表情で、

「アメリカってこっちなじゃなかったっけ？」

「おまえがどういふ認識か知らないが、少なくとも日本海側にはないな」

「いや、けど地球って丸いじゃん！一周すればつくだろう!!」

確かに地球は丸いから、そういう言う方をすれば大抵の国は掠るだろうが灰谷、一周したら日本だバカ。

「まあ、そういう事にしといてやるよ」

「あ！いまお前オレのことバカにしたろ」

「してないよ」

「いや嘘だ！すんげえバカにした顔してた」

「どんな顔だよ……」

オレは本日二度目の呆れ顔を作りながら、壁の掛け時計を見た。

現在の時刻は午後五時十分前。

先輩と別れて一年。

先輩……あなたの顔を最後に見てから今ちょうど一年が経ちました。

## 放課後センチメンタル

学校からの帰り、灰谷と別れ、一人帰路を歩いていると背後から声を掛けられた。

「キ又ガサ！」

活発な明るい声。そして後ろに妙なアクセントをつけて俺の名前を呼ぶ奴を俺は一人しか知らない。

振り返るとそこには予想裏切ることのない顔が　少し赤味があった茶色の髪にどちらかと言うと日本人よりも欧州系の近いスツキリとした顔立ち。切れ長な目元には髪色と同じ意思の強そうな瞳を躍らせ、快活な雰囲気をつかがわせる少女が、十歩の距離を空け、こちらに手を振っていた。手を振るたびに、頭頂部一つに纏められた長い髪が尻尾のように揺れ動く。傍から見ても充分美人な彼女は人目を惹く。見間違えるはずもない。

「母夏」

彼女の名前を呼ぶ。制服を着ている所を見ると母夏もいま帰りらしい。

深咲<sup>みさき</sup>　母夏<sup>もなつ</sup>、灰谷と並んでよく話すことの多い元クラスメイトだ。『元』というのは、去年まで一緒のクラスであって今は違うクラスになってしまったからなのだが……クラスが変わっても彼女は何かと俺に構ってくれる。

それに去年は色々あってお世話になりっぱなしだったので、俺の中では頭のあがらない数少ない存在の一人でもある。

彼女は追いつくと横に並び、

「いま帰り？」

「みたまんまだけど」

「ぶ〜、反応が冷たい」

「そうか？」

「そうだよ。普通そこは『うんいま帰り、母夏も？』みたいな感じで会話を膨らましていくもんじゃんよ〜」

「そんなものかな……。それより珍しいな、母夏の帰りがこんなに遅いなんて」

左にはめた腕時計を見る。現在、五時二十分。いつも終礼からさほど時間を空けずに帰る彼女にしてみれば、随分と遅い時間だ。

俺の言葉に、母夏は眉を寄せ、不満もあらわに、

「それが聞いてよく、木崎の奴がさ〜」

と切り出した。

木崎は母夏のクラスの担任だ。正直評判はあまりよくない。その理由として、恐らく今の彼女の不満の原因が全てなのだろうが……。彼女は続ける。

「いち早く教室を出ようとしたら、それが目に止まったらしくてさ〜。『俺の話がそんなにつまんなかったか』とか嫌味っぽく言っちゃって、あげくに嫌がらせのように手伝いを押し付けてきてさ。もう、ほんと最悪！」

その時の事を思い出したからなのか、怒りが再燃し、今にも歯軋りでも立てそうな勢いで『ぐぐぐ』と凄む彼女は、本当に頭に来ているようだ。

まるで噴火寸前の火山のようだな、などと思いつつながら、しかし今

の彼女に余計な刺激を与えるのは賢明な行動ではないので、俺は同情を込めて、

「ご愁傷様」

と言えば、彼女はキツとした視線をこちらに向け、

「なによ、人事みたいに！」

「いや、実際に人事だし」

「この薄情物！！」

そう言っつて母夏はそっぽを向く。

やれやれ……。こうなったら中々機嫌を直してくれないのが母夏だ。

さて、どうやってご機嫌をとったものか、と考えていると、この状態の母夏にしては珍しい事に彼女の方から『ねえ』、と話しかけてきた。

ん……？ と彼女の方を見やれば、彼女は不安そうな表情を浮かべ、言いよどむ様に一度、上唇を軽く噛んだ後、こちらを見て、

「何かあった？」

と聞いてきた。

何か……とは、『何』を指してそう聞いてきたのか。心当たりを探れば……まあ、ない事もない。

「何でそう思ったの？」

「だって今日のキヌガサ、なんか無理してる。表情が辛そうだよ」

はあ、灰谷に続き母夏にまで……。どやら俺はとことん表情に出

る性質らしい。

こんな簡単に明け透けに心情を見破られるなんて、ちょっと問題じゃないだろうか。

「そんなに顔に出てる？」

少し凹みながら言うと、

「うん、少なくともあたしには違和感バリバリ」

「……そうか」

足を止め、短く嘆息。彼女も自然と立ち止まり、

「理由……、聞かないほうがいい？」

「そうだな、聞かないでくれるとありがたい」

「そっか……。うん、わかった。なら聞かないでおく」

「気つかわせて悪いな」

「そう思うならジューズの一本でもおごれ」

そう言っで一瞬で雰囲気を変えると、彼女はニカッと快活な笑顔を見せる。

正直いまはこの気づきありがたい。

だから俺は、

「ああ、一本だけな」

そう言った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8378y/>

---

青空の星

2011年11月25日00時17分発行